

## 自根 金の キューバの呪い ①

# この街には 何度も来ることになりそうだ…



### プロローグ

高い空だ、と思った。海からの風がくすんだ空気を吹き払うのか、それとも車が少ないからだろうか。ハバナの空は、今まで目にしたどの街の空よりも澄んで見えた。

その空がいつの間にか重く分厚い雲に覆われ、あっという間に土砂降りのスコールがやってくる。道行く人たちは、建物の軒先や大きな木の下で雨宿り。20分もすれば、雨は足早にどこかへ走り去ってしまう。水たまりを避けながら歩き出す人々の歩調は、どこか踊るように弾んで見える。ふしぎな街、というのが最初に思い浮かんだ印象だった。

次の角を曲がる。やみくもに歩き回る。犬がいるところだけじっくり立ち止まるいつものスタイルだ。歩く民俗学者、宮本常一氏の教えを思い出した。初めての街では、とにかく最初に高いところに登って街の輪郭や作りをじっくり眺めるのが正解だ。

1959年1月1日、独裁者バチスタ政権に対する革命闘争に勝利した司令官フィデル・カストロ・ルス率いるバルブードス（髭男たち）が、最初に司令部を置いた旧ヒルトン・ホテルを目指す。ハバナの新市街中心部にそびえ立つこのホテルは、現在「ハバナ・リブレ」と名を変え生まれ代わっている。かつて、この中二階はラッキー・ルチアーノやマイヤー・ランスキーら、シカゴ系マフィアの物たちが仕切る大規模なカジノだった歴史的文化遺産だ。発狂しそうなほどのろいエレベーターで最上階へ。吹き抜ける風が気持ちよいテラスから街を見渡した。

質素な街だ。いかにもソ連製、というタイプの不細工な

高層ビルや、革命前に建てられた大きなホテルが目立つが、街並みはやさしくハデさがない。ハッターが感じられない正直な街。楽しくなりそうだ。

音だけはうるさいが、ほとんど冷えていないエアコンの前で涼んでから、きつい日差しの通りを歩き出す。ラダやモスコビッチ、ソ連製の無愛想に角ばった車に、1950年代からずっと現役のキャデラックやオールズモビルの丸いシェーブが混じる。剥げた塗装のボロ車たちが何ともユーモラスでかわいい。

カストロの母校ハバナ大学の前を抜けて、次の角を曲がる。ゆるやかに下る通りを歩いていて、何かが違うことに気づいた。ほかの街と違う。決定的に違う。ペンキの剥げかけた壁。ガタついた建てつけの家々。歪んだガラス窓。デコボコの街路。何が違うのだろう。緑が濃く見える。植物が元気。いや、違うな。働くのが嫌いそうな人々？ それも違う。水蒸気をたっぷり含んだ空気？ どこかアジアの街みたい？ まだ違う。大気中の微粒子が熱気とともに立ち騒いでいる。

次の角を左に曲がったところで、急に気がついた。世界中のどこの街に行っても必ず見かけるものがない。当たり前すぎて目にも留まらないものが、確かにこの街にはない。グローバル・スタンダードからまったく外れている。どこでも目にするもの、そう、コココーラの赤いロゴ。クレジットカードの黄色いサイン。ファーストフードのどぎつい看板。広告らしい広告がまったくない。

常日頃、意識せずに視界のある部分を占めているお約束

の存在。それが取り除かれただけで、世界はこれほどまでに違って見えるものか。アクセントになっているのは革命スローガンの看板だけだ。半分崩れかかった建物すら健気に見える。まったく化粧つきのない、素っぴんの横顔がまぶしい街だった。

歩きがいがありそうだ。また、屋根の上に黒い雲が広がり始めていた。スコールが近づいている。通りを行き交う人たちが、サルサのリズムで駆け出していった。

4歳だった少女はこの空を記憶の片隅に刻んだらうか。きつい太陽の光や、甘く濃い夜の闇を思ったらうか。急にやってくる雨を避けて走る母親の手を握りながら、弾むように駆けたのたらうか。

1987年、大韓航空機爆破事件で逮捕され死刑判決を受けた北朝鮮の秘密工作員、蜂谷真由美こと金賢姫（キム・ヒョンヒ）は、ハバナに赴任した外交官の両親と4歳まで

この街で暮らした。当時の大使館は取り壊されてしまったため、ハバナの街にその痕跡は残されていない。

だが、彼女が目にしたであろう空や太陽、そして夜の闇は、今もそのままだ。爆発物を仕掛けたときか、拘束され服毒自殺を図ろうとしたときか、あるいはソウルに移送され自決防止用のマスク姿でタラップを降りたときか、彼女はこの空を思い浮かべていたような気がした。切ないほど澄んだ空だった。

この街には何度も来ることになりそうだ。心の奥底で自分ではない誰かの声が出た。もう30年近く前、最初にキューバに入国した翌日の午後のことだった。以来、何度キューバを訪れたことたらうか。渡航歴30回、滞在日数は合計すれば2年弱。あの午後、耳にした声はやはり真実だった。（続く）

しらね ぜん

日本で唯一、世界中でも2人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。東京出身。青山学院大学卒。

仕事（撮影取材調査渉外観察記録編集企画制作など）、その他（探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など）、さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類400万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネイトも担当。これまでに訪れた国は、6大陸、150カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。定点観測と路上観察を続けている。キューバは、1989年以来、30回目の訪問をマークした。



キューバとの友好をめざす各団体に参加の要請があり、キューバ友好円卓会議も参加します。

入場無料★どなたでも自由に参加できます。参加される方は、どの分科会に参加されるかを円卓会議（下記）までお知らせください。

FAX 03-3415-9292 e-mail cuba.entaku.0803@gmail.com

## 第4回 全国キューバ友好の集い

ケニア・セラーノ・プイグ I CAP 総裁を迎えて

9月25日（日）13:00~17:00

主催 駐日キューバ共和国大使館

会場 エデュスカ東京（全国教育文化会館）7階会議室 TEL 03-5210-3511

東京メトロ有楽町線「麹町駅」下車徒歩2分、東京メトロ丸の内線・南北線／JR線の「四ツ谷駅」下車徒歩7分／都営新宿線、東京メトロ有楽町線、JR線「市ヶ谷駅」下車徒歩7分

### プログラム

- 13:00 全体集会 マルコス・ロドリゲス駐日キューバ大使あいさつ  
ケニア・セラーノ I CAP（キューバ諸国民友好協会）総裁あいさつ  
友好団体の活動報告（ビデオ上映）
- 14:00 分科会 テーマ①「経済封鎖」②「キューバ訪問・ブリガダ参加」  
①の進行役 日本キューバ友好協会、CUBAPON、キューバを知る会・大阪  
②の進行役 キューバ友好円卓会議、民医連、ピースポート
- 15:30 休憩
- 15:40 閉会会議 キューバから来日する伝説のルンバグループ  
ムニェキースデマタンサスの生演奏
- 17:00 終了

